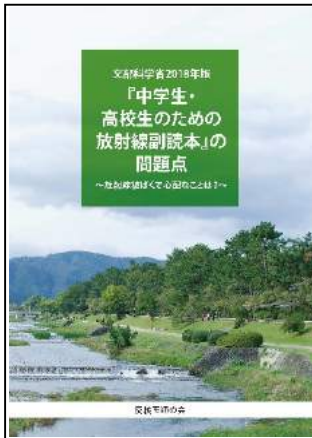


## 福島第一原発事故10周年にあたって 第二弾

### 放射線副読本の問題点～池 浩さんにお伺いました



2011年の東日本大震災から10年が経ち、福島第一原発事故後、原発の廃止や自然を利用したエネルギーへの転換を求める意見が国民の多くから表明されてきてはいますが、原子力発電所は今も西日本を中心に稼働しています。原発の事故を忘れ去ってしまわないためにも改めて放射線の影響について考えていかなければならないのではないのでしょうか。

今回は大場院長が関わっておられます反核医師の会が発行した「文部科学省 2018年版【中学生・高校生のための放射線副読本】の問題点」の執筆・編集に参加されました池 浩さんにお話を伺いました。

#### ★ 放射線副読本の問題点 10点のポイント ★

- ① 事故の実相を伝えていない。「事故」の記述抜きでいきなり「復興」を書いている。
- ② 内部被ばくと外部被ばくの違いを認めていない。実態は「内部被ばく」の軽視である。
- ③ 医療被ばくに比べて事故による被ばくは小さいという論旨。この二つを比較するのは不適切である。
- ④ 食生活習慣(飲酒・喫煙など)による発がんや自然界に存在する放射線の被ばくを引き合いに出して、事故の影響は小さいように書いている。
- ⑤ 甲状腺がんなどの因果関係は未だわからないところを、関係ないかのように書いている。チェルノブイリに比べて低線量であることから「影響はない」と強弁している。
- ⑥ 除染した箇所の検査データを挙げて「放射線量が十分低下した」と言っているが、除染していない場所の放射線量はずっと高い。検査する場所により徐々に溜まって増えている場所もある。
- ⑦ いじめや風評被害に注目させているが、そもそもどちらも原発事故があったから起きたこと。食品汚染はいわゆる根拠のない「風評」には当たらない。放射線量の減少は測定値で説明すべきこと。
- ⑧ 日本の食品安全に関する基準が厳しいから、大丈夫であるとは言えない。流通の実態を重視して、放射線量の影響を評価すべきである。
- ⑨ 安全神話もあり、事故対策が十分ではなかったという反省がない。ヨウ素の配布など適切な対応を取れていなかった。
- ⑩ 事故前の「事故は起こらない」というトーンから、「原発があつて事故が起きてても怖くない」というトーンへの書きぶりとなっている

原発を推進する大人たちが何か不都合なことを子どもたちに伝えなかったり、放射線の影響を印象操作されたデータや記事で言い逃れたりすることがあるとすれば、問題視せざるを得ないということが池さんの想いであるこ

とを深く感じました。印象的だった言葉があります。『人間の健康とか思い切りきちんと生きられる環境を、今の世代そして先の世代に残していくことが一番大事じゃないかなって。』———子どもの放射線被ばくは遠いところの話ではなく、身近な方やお子さん・お孫さんにとっても大事なことだと考えて頂けたら幸いです。

「反核医師の会」のホームページでは、今回のテーマで取り上げました 文部科学省 2018 年版『中学生・高校生のための放射線副読本』の問題点～放射線被ばくで心配なことは？～のPDFファイルをダウンロードできるようになっています。ご興味がおありの方はぜひダウンロードしてご覧ください。

反核医師の会ホームページ <http://no-nukes.doc-net.or.jp>

PDF ファイルダウンロードページ

[http://no-nukes.doc-net.or.jp/activity/news/210701fukudokuhonhihan\\_all.pdf](http://no-nukes.doc-net.or.jp/activity/news/210701fukudokuhonhihan_all.pdf)

### 池 浩さん【自己紹介】「放射線から子どもたちを守る三郷連絡会」事務局担当

大場敏明理事長と高校時代の同期生です。2011年の福島第一原発事故以後、その同期生会で「原発をどうする？勉強会」というのができまして、私がお世話人の一人をやっている中で、大場先生から「放射線から子どもたちを守る三郷連絡会」の事務局の仕事も少し手伝ってという話をいただき、2012年4月からこちらに週1回程度伺っております。

趣味は写真、自転車旅、室内楽合奏（チェロ）など。仕事としては工学分野の研究をずっとやっておりましたが、労組活動などにも力を割いた時期もあります。



### <インタビューア 原崎 真実さん 自己紹介>

クリニックふれあい早稲田でクラークと事務をしています。

みさと子育て応援フードパントリー（食品配布支援）をお手伝い中。

2児の母で長男はサッカー好き高校生、次男は医療的ケアのある中学生です。次男は、アカシア訪問看護ステーションの川上さん達にお世話になっています。

趣味は読書と映画鑑賞、サッカー観戦です。

池さんにインタビュー中です



事業所 あれこれ

## アカシアの家2号館(仮称)開設に

医療法人財団アカシア会

介護本部 寺田 慎

アカシア会介護部は、今年5月に三郷市から公募のあった介護保険事業計画に則ったグループホーム設立への手上げをしました。

建設予定地は三郷工業技術高校のすぐ裏、様々な世代が生活の中で行きかう今回のグループホームは 2 ユ

ニットの認知症対応型グループホームです。従来型の自立生活支援を軸にしたその人らしい生活と人生を支援する運営をすることはもちろん、地域と様々な点で協力しながら、そして地域の人達が必要としている時に利用できる緊急ショートや共用型デイにも対応できる環境を整えていく予定です。

### <構想は地域の方や当事者の方と議論・意見交換の中で>



現在は開設に向け設計についての意見を交換したり、懇談会を開き地域に求められることを確認したり、地域に求めている内容を模索したり、楽しくも頭の痛い日々を過ごしています。

今回の目玉コンセプトの一つは2ユニットのうち1ユニット(9人定員中5~6名程)は若年性認知症の方が入居したくなる、積極的に若年性認知症の方を受け入れるグループホームであるという点です。

### <若年性認知症の方を意識したグループホームを>

現在、日本には若年性認知症の方の専門の入所施設はありません。そんな中、認知症及び若年性認知症の方たちは年々増えています。診断を受けると絶望を感じ、仕事を離れ孤立してしまう人も少なくありません。そんな中、今回のグループホームではその部分にも力を入れ、若年性認知症の方が地域の中で働き続けることができるような労働の場を作ったり、地域の中に働き場を探したり、地域社会の中で誰かの役に立ちながら、生きがいを持って暮らし続けることができるようなグループホームを作り上げたいと考えています

また、今回は建設に向けた構想を練る段階から若年性認知症当事者の47歳の男性の方や別の若年性認知症の夫と共に暮らす妻にも開設懇談会に参加していただき、当事者や家族の目線でどんな暮らしを望んでいるか？を表現していただき、運営へのヒントを吸収させていただいています。

### <当事者の方が入居したいグループホームは>

当事者の方たちには入居したとして臨む支援や環境、設備についても、ご意見をいただいています、例えば「毎日お風呂は入りたい！」「読書できるスペースが欲しい」「運動しないとまっちゃんから器具とか置けないか？」というような、介護をする側からは気づきづらい視点などをハツと再確認させられています。実は、当事者である彼自身職場を退職せざるを得なくなり、職を失っていました。しかし、県の若年性認知症コーディネーターと出会い、元々の明るい性格もあり認知症であることをオープンにして、コロナ禍でありつつも現在は家事を担いながら、運動を継続し、講演活動などを行いながら色々な人と交流をしながら日々暮らしています。

### <選ばれるグループホームに向けて>

これからの時代は当事者主体、運営をするのは法人になるが、働く側の都合で行う介護の時代は終わり、これからは入居する当事者達が自ら選び、自らの生活を作り上げていくそのサポートを介護職員は徹底して行っていく、そんなケアのあり方を発展させながら、運営することになる、そんな予感がして開設に向けた準備をしています。来年素敵なグループホームが出来たとまた報告ができるよう努めていきたいと思っています。

## とっておきの一枚



アカシア会カレンダーの2019年7月の写真「二人のお兄ちゃんとボク」でデビューした3番目の孫、弘田湊祐(そうすけ)です。  
<クリニック大場院長>

クリニックで往診と相談パティオで支援しているKさんに覆面レスラー、ミステル・カカオさんから覆面が送られてきました。Kさんは、遷延性意識障がいのため在宅で生活しています。



## 楽しみな地域共生社会

「楽しみ」を書いてと記事の依頼があり、「俺にとって楽しみとは何だ？」と考えさせられました。見当たらないのです。そこで自分が細く長く続けている事がもしかしたら、としました。

良くある話しですが、今は成人となった子供が小さい時に興味を持ち、生きものを飼ったものの、知らないうちに親父が世話するようになりますことがあります。

私も同様で、当初の飼い主が持て余しているからと言われ、子供にせがまれ飼うことになるも、未だ飼い主の手を噛むミニチュアダックスフンド（18才）、卵から幼生期の細かい餌やりを経て、何故か私が大きく育てた6匹のアカハライモリ（16年）、カラスに攻撃され血まみれになっているところを子供に指示され保護、看護したミドリガメ（15年）。

毎日毎日私が世話する中で本当にいろいろなことがあったのですが、誰も感謝してくれませんか、餌をもらう事に必死のカメは乙姫にも会わせてくれそうにありません。でも、こいつらが現在元気なのは「俺のおかげだ」と自画自賛している事が唯一の「楽しみ」なのかもしれません。

障がい福祉相談支援センターパティオ  
施設長 横堀 公隆



ぶりん



名前は、  
まだない



亀 吉

### 《法人の動向》 法人からの訴え

新型コロナウイルスの猛威は全世界を揺るがし、感染の拡大は年齢を問わず広がっています。医療崩壊は進み、必要な医療が受けられず在宅死が毎日のように発生しています。亡くなった方はどんな思いで人生を閉じたのか。無念で、無念でなりません。第一線で働く医療関係者には本当に頭が下がります。

日本で、埼玉で、三郷でも感染を抑える事が今の第一課題です。この中で痛感した事は政治判断と実行力が大きく左右するということです。

菅総理は、問われると「国民の命を守る」「安全・安心」を繰り返すが、発信力と実行力は弱々しく空しく響くだけです。

衆議院議員の任期が切れ、11月までには総選挙があります。政党や立候補者の新型コロナウイルス対策をはじめ政策にしっかりと目と耳を傾けて貴重な一票を投じましょう。

#### 【編集あれや これや】

・「放射線副読本」の問題点については、あまり知られていないのが実際だと思います。インタビューに応じて頂いた池さん、ありがとうございました。インタビューしてくれた原崎さん、ご苦労様でした。原発事故については、今後も継続して掲載していきます。

・若年性認知症の方を支援する事を意識したグループホーム建設構想が進められています。社会に一石を投じる気配を感じるのは私だけではないと思います。時期をみて二報を掲載したいと思います。（長島）